不定期連載
ムジカノーヴァ
子ども音楽塾

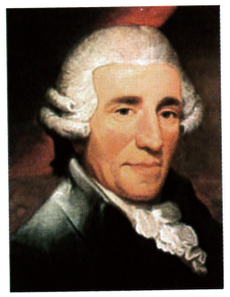
第3回 バッハ先生のかつら

学校の音楽室の壁にズラーッと並んでいる大作曲家たちの肖像画、見たことありますね？
その先頭にいる人が、音楽の父と言われるヨハン・セバスティアン・バッハ先生です。音楽室でバッハ先生の隣に飾られているゲオルク・フリードリッヒ・ヘンデル先生との共通点、わかりますか？
そうです!! 二人とも「かつら」をかぶっていることです。

文―岳本恭治（ピアニスト・音楽ジャーナリスト）

J.S.バッハ（1685-1750）

ヘンデル（1685-1759）



ハイドン（1732-1809）

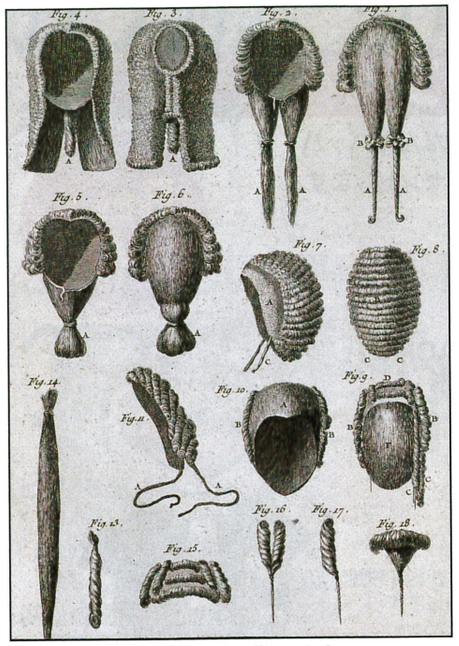
モーツァルト（1756-1791）

バッハ、ヘンデル両先生以外の作曲家では、ヨーゼフ・ハイドン先生がかぶっているぐらいですね（若いころのモーツァルト先生の肖像画にも、かぶっているものがあります）。

では、なぜ古い時代（バロック時代や古典派）の作曲家は、「かつら」をかぶっているのでしょうか？ お話は、ずっと昔にさかのぼります。

バロック時代が始まったころ（日本が江戸時代に入ったころです）、フランスにルイ13世（在位1610-43）という王様がいました。この王様は、現在世界遺産にもなっている、豪華な装飾と広大な庭園で有名な「ヴェルサイユ宮殿」を建て始めた人です（完成させたのは、その子どものルイ14世です）。

このルイ13世、実は薄毛に悩まされていました。そこで「かつら」を作らせ、かぶるようになったのです。しだいに家来たちも王様にしたがってかぶるように



ディドロ『百科全書』より「かつら」
図版提供：ポーラ文化研究所
1751年から72年にかけて敢行された「百科全書」では、「かつら」の項目に14ページもさいています。

オルガンを弾くバッハ（作者不明の絵画の一部）
「かつら」の後頭部がわかります。バッハの「かつら」は「スクェア・ウィグ」と呼ばれるもので、左の「かつら」の絵のFig3と4（上段左端２点）が、その「スクェア・ウィグ」になります。同じ「スクェア・ウィグ」でも、さまざまに変形したタイプがあったそうです。

イギリスの風刺画
「大流行のかつら、または当代のはげ論争」
R.ニュートン画　1790年ごろ
図版提供：ポーラ文化研究所
18世紀中ごろになると、身分の低い人たちも「かつら」をつけるようになりました。異常な加熱ぶりを見せる「かつら」ブームや過剰な装飾の数々などを描いた風刺画が、たくさん描かれました。

なり、「かつら」は、社会的地位や権威を示すための格好のアイテムになりました（今でもイギリスの裁判官が、法廷で白いかつらをかぶっているのを見たこと、ありますか？）。

またルイ13世以降、宮廷の装飾が異常ともいえるほど派手になり、非実用的な華麗さや優雅さを表現するために、取り替えるだけで髪型や髪の飾りを簡単に変更できる「かつら」は、上流階級の流行ファッションとなりました。

バッハ先生は宮廷に仕える身分で、上流階級ではありませんでしたが、音楽家、商人、役人など、貴族や王侯に仕える人も、宮廷等の慣習に合わせてかぶったのです（ニュートンもかぶっていますが、彼は貨幣局の長官を務めた高級官僚でした）。

また、ずっと「かつら」をつけているのは重く、「かつら」の中が蒸れてしまうので、たとえば家庭や私室などの宮廷以外の場所では、縁のない帽子をかぶっていたようです。つまり、バッハ先生も、家でチェンバロやクラヴィコードを弾くときには、「かつら」をとっていたということです。そんなときのバッハ先生は、おそらくあの肖像画とは、かなり違った印象だったことでしょう。メヌエットやインヴェンションを練習するときにでも、想像してみてください。練習が楽しくなるかもしれませんよ。

17世紀後半になると、おしゃれのひとつとして、さまざまな色の「かつら」をつけたり、「かつら」にでんぷんやおしろいの粉を振りかけたりするようになります。粉を振りかけると周りが真っ白になってしまうので、王侯貴族は「粉かけ専用室」を持っていました。さらに、召し使いが粉を降りかけるときに、顔まで粉まみれにならないように、メガホンのような円錐状のものを顔に当てて、粉がかかるのを防いだそうです。

裕福な人々は、いくつもの「かつら」を持っていて、目的や場などに応じて使い分けていました。あるドイツの領主が破産したあと、その財産を調べてみたら、なんと500もの「かつら」が発見されたという、とんでもない話も残されています。

子どもたちに親しまれている作曲家 mini mini 辞典

ピアノ教本や発表会のプログラムなどでお馴染みの作曲家12名を一挙紹介！
レッスンにお役立てください。

う **ヴァン・ド・ヴェルド** 『メトードローズピアノ教則本』ほか

……

か **カバレフスキー** 《2つのソナチネ op.13》ほか

き **ギロック** 『叙情小曲集』ほか

く **グルリット** 《ゆかいなさすらい人》
《おどけたギャロップ》ほか

グローバー 『グローバーピアノ教本』ほか

け **ケーラー** 《ソナチネ op.300》ほか

……

は **バイエル** 『バイエルピアノ教則本』ほか

バスティン 『バスティン・ピアノ・ベーシックス』ほか

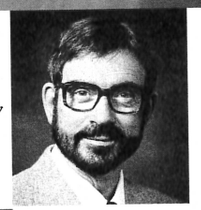
バーナム 『バーナム ピアノ テクニック』ほか

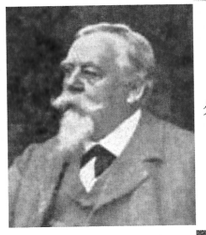
ハノン 『ハノンピアノ教本』ほか

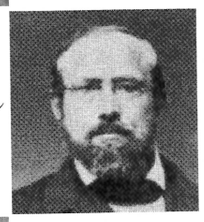
……

ふ **ブルクミュラー** 『ブルクミュラー25の練習曲』ほか

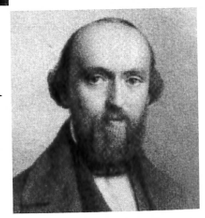
へ **ペース** 『ペース・ピアノ教育シリーズ 音楽をはじめよう』ほか


ギロック


グルリット


バイエル

ハノン


ブルクミュラー

■イラスト――東 忠夫

1911 38歳 **練習曲集《音の絵》作品33**
1913 40歳 ローマに滞在。**ピアノソナタ第2番作品36**、交響詩《鐘》
1914 41歳 英国に演奏旅行、第一次世界大戦
1915 42歳 《ヴォカリーズ》、合唱曲《晩祷》。スクリャービン没
1916 43歳 イワノーフカ滞在
1917 44歳 **練習曲集《音の絵》作品39**。ロシア革命を逃れて出国
1918 45歳 スカンジナビア諸国を経てアメリカへ移住。演奏活動を開始
1919 46歳 アメリカ各地へ演奏旅行
1925 52歳 ヨーロッパで演奏活動再開
1926 53歳 作曲活動再開。**ピアノ協奏曲第4番作品40**
1929 56歳 パリに移転
1931 58歳 **《コレルリの主題による変奏曲》作品42**
1934 61歳 スイスのルツェルン近くの別荘「セナール」で過ごす。**ピアノと管弦楽のための《パガニーニの主題による狂詩曲》作品43**
1936 63歳 交響曲第3番
1938 65歳 シャリャーピン没
1939 66歳 第2次世界大戦。アメリカに戻る
1940 67歳 ロングアイランド滞在。《交響的舞曲》
1941 68歳 ナチスがソ連侵攻。祖国救援活動
1942 69歳 カリフォルニアへ移住
1943 69歳 3月28日、ビバリーヒルズで没

スイスの別荘「セナール」はセルゲイの「セ」とナターシャの「ナ」をつなげた命名

●スクリャービン

ラフマニノフの1歳年上のスクリャービン（1872-1915）は、革新的な和声書法で独自の音楽世界を築いた。同時代に生きながら、19世紀的ロマン派様式にとどまったラフマニノフとは対照的な作曲家だったが、生涯を通じてよき友人であり、ライバルでもあった。スクリャービンの死に際して、ラフマニノフは追悼の演奏旅行を行った。

●練習曲集《音の絵》作品33、作品39

ピアノのテクニックと音による絵画的な表現が結び合わされた練習曲集。作品39は、作品33から5年の時を経て作曲されたロシア時代最後の作品。

●アメリカ時代のピアノ曲

アメリカに移住してからのラフマニノフは、多忙な演奏活動のため作曲活動は滞りがちだった。《コレルリの主題による変奏曲》は、コレルリの「ラ・フォリア」の主題による20の変奏とコーダ。ピアノ協奏曲第4番、ピアノと管弦楽のための《パガニーニの主題による狂詩曲》、交響曲第3番、《交響的舞曲》と並んで、ラフマニノフがロシアを去ってから完成させた数少ない作品のひとつだ。

●ピアニストとしてのラフマニノフ

録音技術の開発が進んだ20世紀の初め、ラフマニノフは自作やロマン派作品の演奏の録音を残している。自作の解釈はもちろん、当時の演奏様式を知る意味でも貴重な記録だ。

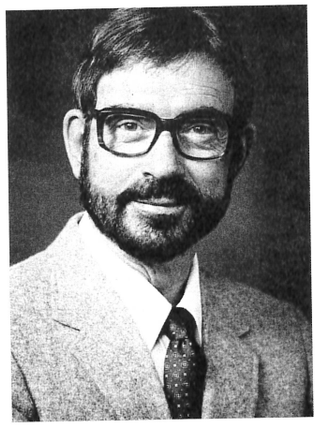
参考文献：『伝記ラフマニノフ』バジャーノフ著、音楽之友社 『ラフマニノフ その作品と生涯』ソコロワ著、新読書社 『ロシア音楽史』マース著、春秋社 『ロシア音楽史』クリューコフ他著、全音楽譜出版社

映画『ラフマニノフ ある愛の調べ』より
©2007 THEMA PRODUCTION JSC ©2007 VGTRK ALL RIGHTS RESERVED

カリフォルニアにて（1919年）

※クレジット表記のない写真は『伝記ラフマニノフ』バジャーノフ／著、『音楽史大図鑑』属 啓成／著（すべて音楽之友社）より転載。

グローバー



ギロック

エルネスト・ヴァン・ド・ヴェルト

Ernest Van de Velde

1862年(リール)－1951年(トゥール)

導入期のピアノ教本《メトード・ローズ La méthode rose》の作者であるエルネスト・ヴァン・ド・ヴェルトは、フランスの指揮者、音楽教師、出版者。

リール音楽院で学んだあと、パリでコンセール・コロンヌ管弦楽団の指揮者を務めるなどの音楽活動を始めた。

音楽教師としては、それまで世の中で広く使われていた教材ではあきたらず、1892年ころ、さらに良い教科書や教本を出版するため、みずからの出版社を設立した。このころ出版されたのが、《メトード・ローズ》の初版である。1907年、リールからトゥールに移住。この地で出版業を発展させることに専念した。

彼が出版した教科書や教本は、フランス国内のみならず、国際的に高く評価されるものも多かった。中でもピアノ教本の《メトード・ローズ》《ピアノのテクニック Le délicateur》、ヴァイオリン教本の《可愛いパガニーニ Le petit Paganini》、《みんなのソルフェージュ Le solfège populaire》などは、ミリオンセラーとなっている。

（文：編集部）

ドミトリー・ボリソヴィチ・カバレフスキー

ロシア語：Дмитрий Борисович Кабалевский

英語：Dmitri Borisovich Kabalevsky

1904年(サンクトペテルブルク) - 1987年(モスクワ)

旧ソビエト連邦（ロシア）を代表する大作曲家のひとりで、ソ連政府公認の作曲家。ピアニスト、作家としても活動した。

ロシアのサンクトペテルブルクで数学者の息子として生まれ、父は息子を数学者にするのが夢だったが、カバレフスキーは幼少のころから、ピアノをはじめ詩や美術といった芸術的な才能に恵まれた。特に音楽に大変興味を示し、音楽家になる決意のもと、1925年からモスクワ音楽院で、作曲をニコライ・ミャスコフスキー（ペテルブルク音楽院でプロコフィエフと同級生）に、ピアノをリストの孫弟子で大ピアニストのゴリデンヴェーイゼルに師事した。1939年には母校の教授となり、1940年代にソビエト連邦共産党に入党。社会主義リアリズムに沿ったロシアの民族的な叙情性や一般大衆にも理解のできる明快な作風を追求する。オペラ、交響曲、協奏曲などの大作があるが、児童の教育にも大変興味を持ち、子どもが演奏するための作品や、子どもに聴かせるための作品を多数書いている。

また、彼の著作、『三頭のくじらと音楽の話』（全音楽譜出版社）、『子どもの心をひらく――カバレフスキーの音楽教育論』（音楽之友社）、『カバレーフスキイ・こどもに音楽を語る』（全音楽譜出版社）は、ぜひ、ピアノ指導者の皆さんに読んでいただきたい本である。

（いずれも絶版のため、在庫のある楽器店・書店、図書館等をお探しください）

（文：岳本恭治）

ウィリアム・L・ギロック

William L. Gillock

1917年(ラ・ラッセル)－1993年(デソート)

シンプルでありながら情緒豊かな作品で、ピアノ学習者を中心に今なお広く愛されるウィリアム・ギロック。

1917年7月1日、アメリカ合衆国ミズリー州ラ・ラッセルに生まれた。

同州セントラル メソジスト・カレッジを卒業後、ルイジアナ州のニューオリンズへ移り、およそ21年間ピアノ教師として活躍。その間、子どものためのピアノ作品を数多く作曲した。その後はテキサス州ダラスへ移って作曲活動に専念。また生徒のオーディションやコンクールの審査員やピアノ教師対象のワークショップをアメリカ全土で行うなどの活躍をした。他の作曲家の作品の編集にも携わった

彼の作品が持つメロディの美しさは、「ピアノ教育界のシューベルト」とまで讃えられた。また、リズムやハーモニーも独特で、多彩な作風を誇っている。教育者としてのギロックは、生徒たちの音楽会にも快く出向き、その演奏の長所を見つけては励ます温かい人柄の持ち主で、多くの人望を集めていたという。

元M・T・N・A（全米音楽家協会）会員、同理事会委員、ルイジアナ音楽家クラブ連盟会長、N・F・M・C（全米音楽家クラブ）テキシー地区会長、M・T・N・Aアメリカ南部ジュニア・ピアノ委員長などの役員を歴任。その名前は、「世界音楽家 フーズ・フー」「世界人名辞典」、「メン・オブ・アチーブメント」にも加えられた。1993年9月7日、ダラス近郊のデソートで没す。

（文：編集部）

コルネリウス・グルリット

Cornelius Gurlitt

1820年(プロイセン) - 1901年(アルトナ)

ドイツの作曲家。親しみやすいピアノ曲で知られるカール・ライネッケの父親ヨハン・ルドルフ・ライネッケに音楽を学ぶ。ライプツィヒ音楽院で、カール・ライネッケと同級生になっている。17歳で公開演奏を行い、そのすばらしい演奏によりコペンハーゲンで活躍することとなる。同地でもヴァイセラにピアノやオルガン、作曲を師事。またデンマーク・ロマン派の代表的作曲家ニルス・ゲーゼとも知り合い、生涯親交を結ぶ。

1842年よりコペンハーゲン近郊のヒルシュホルムに4年間滞在。その後ライプツィヒに戻ったのち、兄ルイスが絵を学んでいたローマに渡る。ローマでは聖チェチーリア音楽アカデミーより名誉会員に選ばれ、1855年に音楽教授の称号を得、同アカデミーを終了。

アルトナに戻り、アウグステンブルク公の3人の娘の家庭教師を務めた。1849年にデンマークとプロイセン、オーストリアとの間でシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン戦争が勃発すると、デンマーク陸軍軍楽隊の指揮者を務めた。

作品には、歌曲、ピアノ曲、カンタータ、歌劇、交響曲などがあるが、現在では、ピアノの初級用に書かれた小品がもっとも有名である。

（文：岳本恭治）

デイヴィッド・カー・グローバー

David Carr Glover

1925年-1988年　（アメリカ）

アメリカの教師、作曲家、編集者、指導者。特筆すべきは、ピアノの教則本とオルガンに関する出版物で大きな成功を収めていることである。彼はウォルト・ディズニー・スタジオやカーネギー・ホールのローズ・ルームをはじめ、アメリカ中の数多くの大学や有名楽器店などでレクチャーやデモンストレーションを行っている。

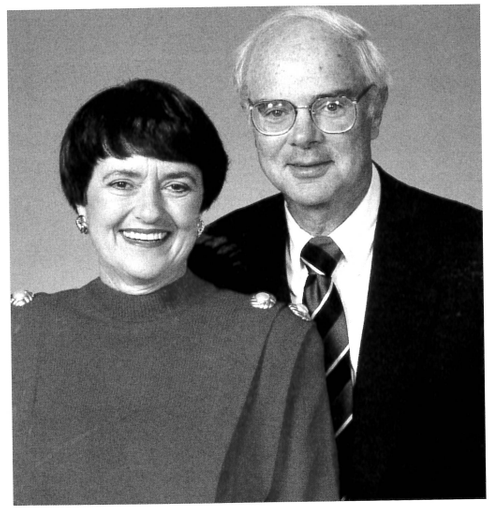
グローバーはブリストー・ハーディン音楽学校でピアノ、対位法、指揮法、楽理、作曲法、およびアンサンブル・パフォーマンスを学んだ。

彼は27年以上、グローバー音楽学校の学長、校長を務めたが、1970年、音楽学校はバージニア州ポーツマスにあるグローバー音楽センターに併合される。

また、彼はスクール・ミュージシャン誌の編集者をしながら、アメリカン・ミュージック・ティーチャー誌にピアノ音楽の評論を書き、バージニア州の東部海岸で音楽教師のためのフォーラムを開催、さらには多くの主要音楽出版社のコンサルタントや編集者の任にも就いた。

「アメリカ・オルガニスト組合」「アメリカ音楽指導者協会」、「バージニア州音楽指導者協会」、「アメリカ作曲家、著者、出版者協会」、「アメリカ音楽教育者連盟」、「アメリカ・ピアノ指導者連盟」、「オルガン、及びピアノ指導者協会」などのメンバーであった。

（訳：久野理恵子）



バスティン夫妻

ルイス・ハインリッヒ・ケーラー

Louis Heinrich Köhler

1820年（ブラウンシュヴァイク）-1886年（ケーニヒスブルグ）

ドイツの作曲家、ピアニスト、ピアノ教師。ピアノをチェルニーに師事している。指揮者としても活躍し、音楽雑誌や音楽新聞に執筆を活発に行った。

また、ケーニヒスブルグで、音楽理論とピアノを教える音楽学校を経営し、全ドイツ音楽家協会を1858年に設立するために多大な協力をした。

3つのオペラ、バレエ曲をはじめとする多数の作品を書いたが、現在では、練習曲や指導書で知られている。

また、彼はペータース版のピアノ楽譜の編纂も多く行っている。中でも、ピアノ学習者にお馴染みの『ソナチネ・アルバム』『ソナタ・アルバム』の曲を選び、編集した功績は大きい。つまり『ソナチネ・アルバム』や『ソナタ・アルバム』を作った人、ということである。

（文：岳本恭治）

フェルディナント・バイエル

Ferdinand Beyer

1803年（クベアフルト）- 1863年（マインツ）

ドイツの作曲家、ピアニスト。ピアノ教育者でもあったバイエルの『ピアノ奏法入門書作品101』（いわゆる『バイエル』である）は、ピアノを学ぶ人たちの最適な入門書として長く親しまれている。

彼は、サロン用のピアノ曲や、当時流行していた管弦楽曲やオペラの旋律などをつなぎ合わせてメドレーにしたピアノ曲で、「ポプリ」と呼ばれるジャンルが得意だった。ピアノ以外の作品も書いていたそうだが、残念なことにそれらはほとんど忘れられ、この教則本だけが今も使われている。

1844年ごろ発行されたといわれる「ピアノ奏法入門書作品101」は、ピアノ教則本で有名なチェルニーによって、「もっとも完全で実用的な教則本である」と太鼓判を押されている。

日本では、明治時代の1880年、音楽取調掛（東京芸大の前身）によりピアノ教材として取り入れられたことが、広まるきっかけとなった。そのときに輸入された15種類75冊の楽譜のうち、20冊がこの教則本だったという。それらはすべて英語版だったので、当時は英語風の発音で、「バイアー」とか「バイヤー」と呼ばれたこともあった。

（文：岳本恭治）

ジェームズ・バスティン

James Bastien　1934年－2005年（アメリカ）

ジェーン・バスティン

Jane Bastien　（アメリカ）

ジェームズ・バスティンは、アメリカ出身のピアノ教育者、音楽家。フランシス・マルキー・ノース、アリエル・ルービンシュタイン、ルイス・アルトゥー、ジョルジュ・サンドールにピアノを師事。サザン・メソディスト大学にて学士号、修士号を取得した。

ジェーン・スマイサー（後に結婚してジェーン・バスティン）は、ステファン大学・バーナード大学を卒業後、コロンビア大学大学院で修士課程を修了。カリフォルニアにピアノ教室を開設した。

1960年にニューオーリンズで出会った二人は、スマイサー・アンド・バスティンとしてピアノ・デュオのユニットとして活動。やがて二人は、自分の生徒たちの指導上必要な曲を作曲し始めた。これが、その後多くのピアノ指導者や生徒たちに多大な影響を与えることになる「バスティン・メッソード」の始まりである。

その後、夫妻は300冊以上に及ぶピアノテキストを出版、革新的なピアノ教育者として知られるようになった。「バスティン・メッソード」は1963年からチョス社より世界中で出版され、今では14ヶ国語に翻訳されている。ジェーン・バスティンの指導講座は、今なお世界各地で開催されている。1999年、M・T・N・A（全米音楽指導者協会）は、夫妻の多大な貢献と成果をたたえて〝Lifetime Achievement Award〟を授与した。

（文：編集部）

エドナ=メイ・バーナム

Edna-Mae Burnam

2007年、99歳で没（アメリカ）

導入期からの教材『バーナム ピアノ教本』『バーナム ピアノ テクニック』の著者であるエドナ=メイ・バーナムは、アメリカのウィリス出版社から41冊のピアノの本と69の小曲を出版したピアノ教育家。

カリフォルニア州サクラメント市に生まれ、幼児期に母親からピアノの手ほどきを受けた。シアトルのワシントン大学で、ヴァニーノ教授のレッスンを受け、その後、カリフォルニア州立チコ・ステート・ティーチャーズ・カレッジを、音楽と幼児教育学の二重専攻で卒業した。さらに、ロサンジェルスのオルガ・スティーブのもとで、作曲とピアノの研鑽を積む。

以後は、子どものピアノ教育に専念。多くの出版活動のほか、余暇には全米の主要都市を訪れ、講義とデモンストレーションで、ピアノ指導者たちの指導にあたった。2007年4月、99歳で他界する。

（文：編集部）

シャルル=ルイ・ハノン（アノン）

Charles-Louis Hanon

1819年（ダンケルク近郊）- 1900年（ブローニュ=シュル=メール）

フランスの作曲家、ピアノ教師、オルガニスト。フランス語では「アノン」だが、日本では英語風、もしくはドイツ語風の「ハノン」の呼び名で知られる。

ハノンは演奏技術の効率のよい練習方法を追求した音楽教育者で、ピアノ以外にも、オルガンや伴奏法のメソードを出版している。

パリ音楽院で学び、教会のオルガニスト、ピアニスト、音楽教育家として活躍した。彼の名前『ハノン』の名で呼ばれるピアノ教則本『60の練習曲によるヴィルトゥオーゾ・ピアニスト Virtuoso Pianist In 60 Exercises』は、ローマのポンテフィカル・サントセシル音楽院で、作曲の名誉教授をしていたころに作曲された。この本が完成した当時、大勢のピアノ指導者から賞賛され、1878年の世界博覧会では銀メダルを受賞した。

現代でもピアノ学習者にとって標準的な教材のひとつとなっている。

作品には、初歩のピアノ教本、大作曲家の名曲を要約した教本がある。また、「ハノン=ピアノ」というイメージが強いが、意外なことに、彼の作品には歌曲も50曲ほどある。

（文：岳本恭治）

特級グランプリの尾崎有飛さん

第31回ピティナ・ピアノコンペティション

王子賞受賞披露演奏会リポート

2月11日　王子ホール（東京・銀座）

輝かしい音色で聴衆を魅了

文●山崎 裕

写真提供●（社）全日本ピアノ指導者協会

王子賞とは、ピティナ・ピアノコンペティションにおいて、G級・特級の成績優秀者計4名に、王子ホールでのリサイタル出演の場が与えられるというもの。今回の受賞者たちによる披露演奏会が、2月に開催された。

コンクール入賞者たちが、その後の演奏の機会に恵まれないことが嘆かれるなか、都心の立派なホールで演奏できるチャンスを得られるのは実にありがたいことだ。

＊

今回は10代の若い才能が目立った。

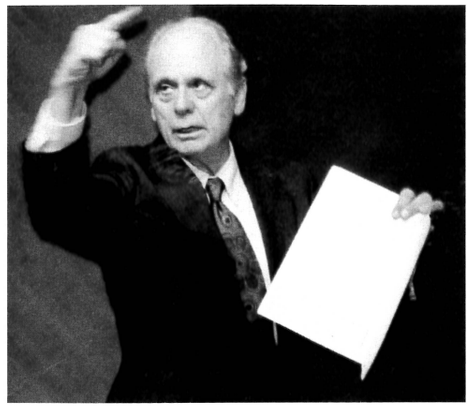
前半は、G級（26歳以下の部門）で受賞した2人の高校2年生。トップバッターはメンデルスゾーン《厳格なる変奏曲》を演奏した銀賞の**加藤大樹**。切れの良いテクニックと歌心で、各変奏の特徴を印象付けた。続く金賞の**佐竹茉梨子**は、シューベルト《3つのピアノ曲》より第1、2曲とスクリャービン《エチュードOp.8−12》《ソナタ第4番》を快演。ややこもりぎみの音質が気になったが、シューベルトでは演奏者本人の心から湧き上がる音楽と美しいレガートが心地良い。

後半は、特級（年齢制限なし）で銀賞受賞の**花田えり佳**（桐朋学園大・研究科1年）。クライスラー／ラフマニノフ編曲《愛の悲しみ》とシューマン／リスト編曲《献呈》で聴衆を和ませ、彼女自身「音楽に対する考えが変わるきっかけとなった」と話すスクリャービン《幻想曲》では、思い入れたっぷりに堅実な演奏でまとめた。

でも、やはり圧巻はグランプリの**尾崎有飛**（ドイツ留学中）だろう。これまでも同コンペティションE級およびG級で金賞、すでに外国でのコンクール受賞歴もある。この日はサン＝サーンス／リスト編曲《死の舞踏》とショパン《幻想ポロネーズ》、リスト《ペトラルカのソネット第123番》《ハンガリー狂詩曲第4番》を演奏。出だしの一音から閃きを感じさせ、彼の世界へどんどんと聴衆を引き込んでいく。作品のすみずみまで音楽・技術的にコントロールされ、超絶技巧も輝かしい音色で端整にまとめる。そこには、すでにコンサート・ピアニストとしての高い資質を感じさせる。

彼ら4人がますますそれぞれの個性と腕を磨き、国際舞台でも埋もれることなく活躍できるようがんばってほしい。

左から尾崎有飛さん、佐竹茉梨子さん、花田えり佳さん、加藤大樹さん。演奏会の模様はPTNAホームページで動画配信中。
http://www.piano.or.jp



ペース

ヨハン・フリードリッヒ・フランツ・ブルクミュラー

Johann Friedrich Franz Burgmüller

1806年（レーゲンスブルク）- 1874年（パリ近郊）

ドイツ生まれの作曲家、ピアニスト。ヨハン・アウグスト・フランツ・ブルクミュラー（後にデュッセルドルフ市音楽監督）の長男として生まれた。なんといってもピアノ入門期のピアノ教則本『25の練習曲 作品100』が有名だが、当時は夭逝した弟のノルベルトの方が高く評価されていた。

1832年以降はパリを中心に活動し、ピアノの小品や少数のオペラ、バレエ音楽などを作曲。とりわけ、ブルクミュラーが大のバレエ好きだったということで、600曲以上にもおよぶ作品の中には、バレエ音楽のピアノ編曲版が多く見られる。19世紀の半ばに、パリでピアノ教師として大活躍したブルクミュラーだが、バレエのレッスンで使われる曲を、ピアノ用に編曲していたのだと思われる。

また、アダンの有名なバレエ曲『ジゼル』の第1幕、《村人のパ・ド・ドゥ》は、なんとブルクミュラーが作曲している。コーダの部分は、ピアノ曲《レーゲンスブルクの思い出～華麗なるワルツ Souvenir de Ratisbonne, valse brillante op.67》から取られており、25の練習曲の中の《スティリエンヌ》にそっくりである。

（文：岳本恭治）

ロバート・ペース

Robert Pace

1924年（カンザス）—

アメリカの音楽教育界を長年にわたってリードするロバート・ペースは、ジュリアード音楽院でジョセフとレジーナ・レヴィーヌの門下生としてピアノを学び、1948年に卒業。同年から1951年まで、コロンビア・アーチストに所属し、演奏活動を行う一方、コロンビア大学教育学部で修士、および博士号を取得。ジュリアード音楽院で教鞭をとった後、1952年にコロンビア大学教育学部に迎えられる。1969年、同大学主任教授。またその間に彼の系統立てられた理念をピアノ指導の教本、教材として数10冊にまとめあげ、「ペース・ピアノ教育シリーズ」として出版、今なおピアノ指導者や生徒に愛用され続けている。

音楽教育界にあっては、1962年より全国音楽教育会議ピアノ部門の議長を務め、1977年よりITF(International Piano Teaching Foundation)を自ら創設、エグゼクティヴ・ディレクターなどを歴任している。1995年、コロンビア大学を退職、名誉教授となる。彼のピアノ指導法は国内のみならず海外からも注目され、日本では1983年、国立音学大学の招聘で訪日、時を同じくしてテキストも日本語訳され、『ペース・ピアノ教育シリーズ』として出版された。

ペースの作曲家としての魅力は、彼自身の作るユニークな曲と同時に、このメソッドで勉強している子どもたちが自然とさまざまなスタイルの曲を作る能力、即興を楽しむ能力を身につける点にある。

（文：神保洋子）

■執筆：神保洋子（「ペース・メソッド研究会」エリア・コーディネーター・在ニューヨーク）
岳本恭治（ピアニスト・音楽ジャーナリスト）
■協力：久野理恵子／全音楽譜出版社／東音企画／ヤマハミュージックメディア